

## 問わず語りの 人間力原論

高見大介



### ただいま、つなかん

ボランティアって何だろう、ボランティアの持つ力って何だろう。そんなことを日々考えているのだが、なかなか難しい。しかし長く大学生と共に地域でボランティアをしていると、気が付くことはある。

活動の計画を立てている大学生から「〇〇地区に行ってこん

なことをしよう」という言葉が「〇〇地区に帰ってこんなことをしよう」と変化する瞬間もその一つ。いろいろ調べてみると「行く」は、元いた場所ではないところへ出向くという意味合いで使われる。そして「帰る」は、あるべき場所に戻るということらしい。どこかよそよそしい彼らが、この変化で地域の一員になるように感じるから、僕はこの瞬間が大好きだ。

彼らが額に汗しながら活動する姿を見て、ボランティアの奥深さを教えられている。でもここで一つ考えてみたいのが「近所の施設で知らないお年寄りの

車いすを押した」ということはボランティアと言われるが「自分の祖父の車いすを押す」ことはボランティアとは言われないのはなぜか。同じことをしていても認識が違うのは、ボランティアという言葉が「心の距離」に関係している言葉だからなのかもしれない。謎は深まるばかりだ。

ボランティアが発展的にボランティアでなくなる瞬間というもの、ボランティアの魅力なのではないだろうか。そんなことを考えていると、東日本大震災の時に学生ボランティアで活動していた友人から連絡がきた。

「気仙沼市の学生ボランティアが映画になりましたよ」と。

映画のタイトルは「ただいま、つなかん」。当時の学生ボランティアのその後や、受け入れた地域住民の姿が描かれたこの映画は、多くをわれわれに教えてくれる。ボランティアとは何か、地域人材とは何か、言い出せばきりがなくらいだ。大分でも3月にシネマ5で上映されるので、ぜひ見ていただきたい。

---

たかみ・だいすけ 日本文理大人間力育成センター長。専門は初年次教育、ユースワーク、ボランティア論。別府市在住。42歳。